

アフリカ農村社会における高齢者の暮らし

—エチオピア西南部における高齢者の活動量と生活自立度の評価から—

野口真理子

背景と目的

近年、アフリカにおいても高齢者の急速な増加が懸念されている。国際連合は、サハラ以南アフリカにおける60歳以上人口が、2050年には1億6千万人に達すると推計している。これは2005年の値の約4倍にあたる[UN 2012]。Apt[1997]は、公共の医療や福祉サービスを受けることが難しいアフリカの農村において、拡大家族を軸とした伝統的社会関係が壊れつつあり、高齢者が脆弱な存在になっていると論じている。またCohen & Menken [2006]は、アフリカの高齢者の生活状況に関するデータの絶対的不足を指摘し、各地域における長期的、実証的な研究の積み重ねと比較検討の必要性を強調している。奥宮 [2007]は、フィールド医学の観点から、老化がすべての人に必ず起こる普遍的現象であることを確認しながらも、老いの在り方は一様ではないことを指摘している。主として医学の分野では、これまで高齢者の生活状況を把握するための一手段としてADL (Activities of Daily Living) やQOL (Quality of Life) といった指標がもちいられてきたが、近年この指標が、さまざまな地域で、高齢者の生活状況を把握または比較するために利用され始めた [石根ら 2007]。本論は、エチオピア西南部農村を事例に、人間の活動量を計測する機器アクティカル (Mini-Mitter Co. USA) と、ADLをもとに筆者が調査地の状況に照らし合わせて改変した調査票をもちいて、高齢者の一日の活動内容および活動量の記録分析と、彼ら高齢者の生活自立度の評価により、アフリカにおける高齢者の日常生活の実態を描きだすことを目的とする。

調査地概要

調査地は、エチオピア南部諸民族州、南オモ県、南アリ郡、M村Z地区である(図1)⁽¹⁾。この地域にはアフロ・アジア語族のオモ系言語であるアリ語を話す、アリ (Aari) という人びとが多く居住する。

アリの人びとは、古くからエチオピア起源のバショウ科作物エンセーテを中心とする農耕を営んできたといわれている。出自は父系をたどる。近年は相続や居住において双系的なふるまいがみられることもある [Gebre 1995]。調査のおもな対象は、M村にある10地区のうちのひとつZ地区に居住するガルタ (*galta*) と呼ばれる人びとである。ガルタとは、アリ語で年長者を指す。2009年に筆者がお

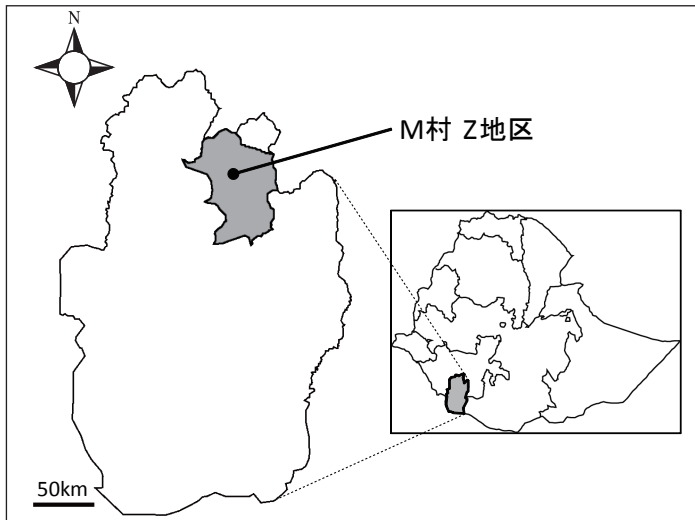


図 1. 調査地地図

表 1. Z 地区男性高齢者の居住状況

No.	推定年齢*	世帯構成員数 (本人含む)	子ども有無
1	88	2	無
2	85	6	有
3	85	2	無
4	75	3	有
5	75	2	有
6	70	7	有
7	70	2	有
8	65	4	有
9	60	2	無
10	60	3	有

表 2. Z 地区女性高齢者の居住状況

No.	推定年齢*	世帯構成員数 (本人含む)	子ども有無
11	87	2	無
12	77	1	無
13	75	1	無
14	70	2	有
15	65	1	有
16	60	2	有

* 推定年齢：調査対象とした高齢者の年齢は、ライフステージの段階、政治体制、さらに近隣に暮らす同世代の人びととの出生順なども考慮に入れて推定した。

こなった世帯調査によると、72世帯292人が居住するZ地区において、ガルタと呼ばれている人は13世帯16人であった。

本論では、ガルタを高齢者と呼ぶことにする。すべての男性高齢者が、配偶者もしくは子ども・孫と共に世帯を構えているのに対し（表1）、女性高齢者の半分はひとり暮らし（独居世帯）であった（表2）。男性の場合、ある程度高齢であっても若い妻をむかえて子どもをもつことが可能であること（例えば表1；No.6）がひとり暮らしの男性高齢者がいない背景のひとつと考えられる。妻とは別居していても、85歳男性（表1；No.2）のように、彼の娘世帯が同居している事例もあった。その一方で、調査をおこなった3人の独居女性の場合、2人は、再婚後子どもが産まれないまま夫が亡くなり、それからひとりで暮らしている（表2；No.12, 13）。残りの1人は、夫が亡くなった後、子どもが成人して新たに世帯を構えたことにより結果的にひとり暮らしをしていた（表2；No.15）。Z地区では、どの世帯もすぐ隣に他の世帯が居住しており、物理的に孤立した世帯はない。次節では、Z地区のガルタのなかでもA氏（表1；No.4）をとりあげて、高齢者の生活の実態を描きだしていく。

高齢者の日常生活

高齢者の日常的な活動の種類と活動量：A氏の事例から

A氏は、75歳（推定年齢）の男性で、50歳の妻と、12歳の四男と一緒に生活している。A氏の長男は、隣の地区に住居を構えて第一夫人とともに暮らしていたが、近年Z地区内に第二夫人をむかえてからは、隣の地区とZ地区両地区間を行き来して生活している。次男と三男は、それぞれZ地区内に住居を構え、A氏と日常的に関わりあいをもちながら生業活動を営んでいる。二人の娘はすでに婚出し、四男は2008年から村内の小学校に通っている。

A氏と世帯構成員の日常活動

筆者は、大雨季の終わりである8月27日から9月4日まで、1日おきに計5日間（120時間）²⁾にわたり、A氏と、世帯構成員である妻、そして四男の活動を観察し、彼らの活動を以下の6つに分類した。①睡眠、②食事、③農作業（畑や家畜に関する仕事をおこなっている時間）、④家事（料理や食品加工、洗濯や掃除などをおこなっている時間）、⑤社会活動（接客、訪問目的の外出など、世帯構成員以外の人と会う・接する時間）、⑥その他／不明（①～⑤のいずれにも分類できないような活動）。

A氏は、起きている時間（60.3時間）のうちおよそ半分（25.5時間）を農作業に、約4分の1（13.7時間）を社会活動に費やしており、家の外で過ごす時間が非常に長いことがうかがえる（図2）。A氏は、農作業の時間の約8割（20.5時間）を家畜に関する仕事（牛の搾乳や牧草地での家畜のつなぎかえ）に費やしており、

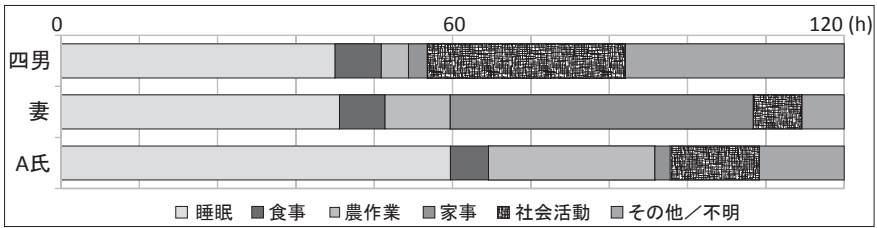


図 2. A 氏と同居家族の 5 日間 (120 時間) の活動状況

残りの 2 割の時間で畑に関わる仕事 (トウモロコシの脱粒作業, 播種のための準備など) をおこなっていた. 社会活動の時間では, 労働力の手配に関わること (牛犁耕作や収穫物の運搬・売却のための人出) や週 2 回開催される村の定期市 (A 氏の住居から約 2 km)⁽³⁾ へ外出するところを観察した. A 氏は, 夕方から夕食までのあいだ仮眠をとることも多く, そのため他の 2 人よりも長い睡眠をとっていた.

A 氏の妻は, 起きている時間のうち, 料理や庭畑における農作業 (おもに自家消費のための収穫作業), 掃除, 洗濯など, 家事に費やす割合が高かった. 彼女の社会活動は, 定期市での買い物, 冠婚葬祭, 地区集会への参加といった, 必要最低限の外出のみであった⁽⁴⁾.

A 氏と世帯構成員の活動量

日常活動の観察と並行して, A 氏と世帯構成員 2 人に対して, アクティカル (Mini-Mitter Co. USA) という機器を約 2 週間着用してもらい, 彼らの活動量を記録した⁽⁵⁾. 解析には Actical Software Ver. 2.10 を使用し, 収集した全データのうち連続して計測できた 10 日間分のアクトグラム (歩行活動量) を分析検討した.

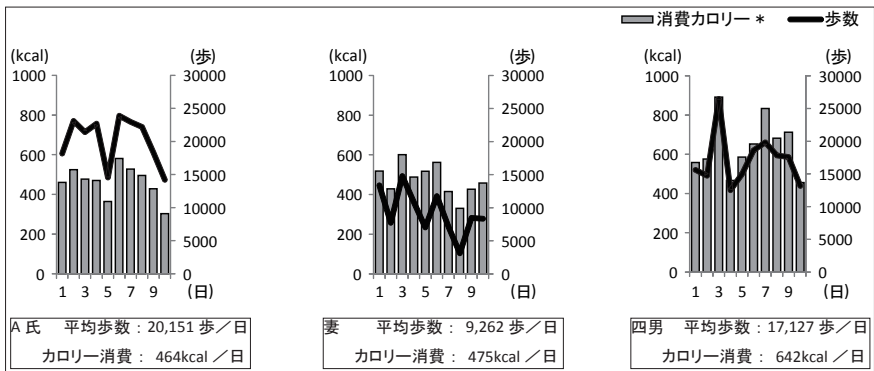


図 3. A 氏と同居家族それぞれの連続 10 日間の歩数と消費カロリー (kcal)

* 基礎代謝は除く.

A氏は妻とほとんど同じ程度のカロリーを日々消費しており、10日間平均歩数では四男を上まわっていた(図3)。前述したように、A氏は運動強度の高い活動(例えば牛犁耕作)ではなく、家畜のつなぎかえや畑の除草や収穫した穀物の脱粒など、より軽度の活動をおこないながら、起きている時間のほとんどを家の外ですごしている⁶⁾。これらの結果は、A氏が、加齢によって身体的な制約が増加し、従事できる生業活動が限定された中で、積極的に社会活動をおこない、自らの子どもをはじめ周囲の人の協力を得て農作業をこなしつつ、世帯内では男女の分業形態を保つことで相互補完的に生活していることを示している。

高齢者の生活自立度

日本では、医療や介護の現場で高齢者の身体能力や生活状況(生活自立度)を評価するためにしばしば、ADL(Activities of Daily Livings: 日常生活活動または日常生活動作)⁷⁾という指標を利用する。筆者は、生存に最低限必要とされる動作であるADL(基本的ADL)の評価項目に加えて、調査地域において生存のために必要であると考えられる活動に関する評価項目を追加して調査をおこなった(表3)。また評価する際は、本人ができるかどうかではなく、日常活動として実際におこなっているかどうかを評価し⁸⁾、おこなっている場合には1点として世帯別に集計した。調査時点(2009年12月～1月)において、Z地区に居住するすべての高齢者がADLに関して満点で、最も基本的なADLを遂行する際に他人の助けを必要とする高齢者はいないことがあきらかになった(表4)⁹⁾。

農作業、家事、社会活動といった項目に関して、個別に検討すると、高齢になるにつれてしだいに活動を縮小させているということがうかがえた。その一方で社会活動としての項目は年齢を重ねても何らかの形で継続しておこなっているということがあきらかになった。例えば88歳男性(表4; No.1, 最年長者)は、週に2回開催される村の定期市へほぼ毎回出かけていた。これに加えて、食糧が不足した時、自身の畑の耕起や収穫作業の労働力が必要な時は、すべて自身で交渉し、生活を成り立たせている。

一方世帯別に検討すると、高齢者本人による農作業や家事などに関する点数の低さを、その配偶者など、世帯構成員が補っている世帯もあれば、そのような存在がいない世帯(表4; No.2, 5)もある。夫婦ともに高齢で、自らがこなせる生業活動がかなり制限されている場合もあった(表4; No.1)。彼らは、近親者がいないため、親族の近くに居住もしくは同居している高齢者とは状況が異なっている。しかしそのような世帯も、近隣の人びとにはたらきかけたりなど、何らかの社会関係を利用して、農作業や家事を依頼する場面や、食糧を授受する場面が観察された。

表 3. 追加した評価項目

農作業	家事	社会活動
1. 牛耕する	1. 水汲みをする	1. 村役場の労働奉仕活動に参加する
2. 手鋤で耕す	2. 薪割りをする	2. 地域の共同労働に参加する
3. 家畜をつなぐ	3. 薪を拾いに行く	3. 感謝祭のための共同貯金に参加する
4. 畑の様子を見に行く	4. コーヒーを沸かす	4. 葬儀講の支払いをする
5. コーヒー畑の除草をする	5. 料理をする	5. 葬儀講にお金を借りる
6. コーヒーの木の手入れをする	6. エンセーテの加工をする	6. 葬儀講に家を建ててもらふ
7. 穀物畑の除草をする	7. 石臼で物をすりつぶす	7. 集会に出席する
8. 種まきをする		8. 土地の売買・貸借の交渉をする
9. 収穫物を背負う		9. 土地契約などの仲介人を依頼される
		10. 夜の見まわりの仕事をする
		11. 葬式の準備に参加する

表 4. Z地区高齢者と同居家族のADLと農作業、家事、社会活動に関する評価

世帯No.	年齢	性別	ADL	農作業 (9)*	家事 (7)	社会活動 (10)
1	88	男	100	1	0	2
	87	女	100	0	3	2
2	85	女	100	1	2	3
	85	男	100	6	0	3
3	娘とその5人の子ども(孫) (n.d.)**					
4	85	男	100	7	5	8
	57	女	100	7	7	8
5	77	女	100	4	4	2
	75	男	100	7	1	4
6	70	女	100	8	6	7
	75	男	100	8	1	8
7	50	女	100	8	7	7
	子ども1人 (n.d.)					
8	65	女	100	7	5	8
	65	女	100	8	1	7
9	妻1人子ども4人 (n.d.)					
	60	男	100	8	0	6
10	50	女	100	9	7	10
	子ども5人 (n.d.)					
11	60	男	100	9	5	10
	妻1人 (n.d.)					

* 括弧内の数値は評価項目数を示す。

** 同居家族で評価していない人に関しては、人数のみの記載にとどめた。

相互扶助に支えられた生活実践

本論では、エチオピア西南部を事例として、高齢者の日々の時間の使い方、活動量、そして基本的なADLと日常活動（農作業、家事、社会活動）に関する生活自立度の評価を検討することを介して、以下の点をあきらかにした。まず、高齢者が配偶者や子どもと同居している場合、それぞれが分業して日常的な生活を営んでいることに加えて、生業活動においては親族や近隣の人びとと日常的な交流を積み重ねてその活動を成り立たせていた。また、近所に親族が暮らしていない（もしくは少ない）高齢者の独居世帯であっても、近隣の人びとと日常的な交流を重ねることによって、社会関係を構築して生活を成り立たせていることがあきらかになった。

次に、高齢者の1日の過ごし方やその活動量には、男性と女性の間で大きな違いがあり、それぞれが相互補完的な生活を送っていることがあきらかになった。このことは、個人の活動能力を把握することに重点を置いたADLの指標では、高齢者の生活の状況を限定的にしか評価できない可能性を示している。それぞれの地域における文化的な実践を背景とした性別役割や周囲の人びととの社会関係を含めて、高齢者の生活実態を把握する必要があると考える。本論の舞台となったエチオピア西南部農村では、個々の高齢者によってその状況はさまざまである。だが、調査地に暮らすすべての高齢者は何らかの社会活動に従事し、実際に飢えることなく、活動的に暮らしている。このことは、たとえ年齢を重ね身体的な制約が増しても、彼ら自身が人びとと関わることで形成して保ってきた社会関係を利用して、主体的に日々の生活をつくりだすことができているということの表れだと考える。

注

- (1) 本論で扱うデータは、2008年8月26日から12月23日、2009年1月29日から3月28日、2009年7月26日から2010年1月26日までの計12ヶ月間にわたる現地調査の結果に基づくものである。調査は参与観察と聞き取りを中心に、食事調査、家計調査、日常生活活動の評価、高齢者の歩行活動量の測定などをおこなった。また本論のもとになるフィールドワークは、文部科学省による大学院教育改革支援プログラム「研究と実務を架橋するフィールドスクール」と、独立行政法人日本学術振興会による「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（ITP）」による支援を受けて可能となった。
- (2) この期間は、トウモロコシの収穫作業がほぼ終了し、次のトウモロコシ播種作業がおこなわれようとしていた。
- (3) 定期市（*gaba*）は、高地／低地、都市／農村さまざまな地域から多くの人びとがそれぞれの品を持ち寄る。この定期市の空間は、単なる経済活動だけでなく、さまざまな交渉がおこなわれる場であり、人びとの交流の場でもある〔重田 2004〕。
- (4) 四男も非常に多くの時間を社会活動に費やしているが、これは学校へ通う時間を含んでいることが影響している。これに加えて特徴的なのは、「その他／不明」の時間

が多いことである。その活動の多くは、両親の仕事をただ見ていたり、ひとり遊びをしていたり、というものである。

- (5) アクティカルとは、人体の歩行活動量のデータを長期間にわたり記録・収集する腕時計サイズ (16 g) の超小型ロガーである。運動の程度と頻度に対応した電流を発生するアクセルメータを内蔵しており、アクティビティ・カウントとして発生電流の積算値を記録することが可能である。調査を依頼するにあたり、筆者がアリ語でこの機器から取得できるデータについて詳細な説明をおこなった。その間、対象者の質問を受けるのはもちろんのこと、必要に応じて英語→アリ語通訳を介しながら、個人情報に関する説明をおこない、彼らの同意を得てから調査を開始した。計測の際には、機器を腰まわりに着用してもらった。
- (6) 妻は A 氏と同程度のカロリーを消費していた一方で、日平均歩数が A 氏や四男より少ない。その理由のひとつとして、その活動の多くを家の中もしくは家のごく近辺でおこなっていることを指摘できる。
- (7) ADL とは、セルフケアを前提とする食事、移動 (平地歩行や階段昇降)、更衣、整容 (身だしなみ)、トイレ動作、入浴などの身辺動作など、人間が生活するうえで最低限必要な基本的動作を指す (基本的 ADL)。ADL 評価指標の最も基本的なものは、バーセル・インデックス (Barthel Index) である。バスに乗ったり、買い物をしたり、家計を管理したり、食事の準備をしたりなど、より難易度の高い動作群を、手段的 ADL (Instrumental ADL) と呼ぶ。広義の ADL を指す場合は手段的 ADL も含まれている。今回の調査では、手段的 ADL を調査地の状況に合わせて改変した。手段的 ADL は運動・労働、知的能動性、社会的役割などの項目に大まかに分類されるが、公共交通手段や銀行、識字などがあることが前提になっているため、農作業 (牛耕、家畜の世話等) や社会活動 (集会や講への参加等) と、より身近だと考えられる活動に関する質問に置き換えた。また、調査地域において世帯内では男女の分業が一般的であることから、女性のおもな活動である家事 (料理、洗濯等) に関する評価項目を追加した。
- (8) 評価はおもに聞き取りによっておこなっているが、本人と 1 対 1 でおこなうことを避け、家族や近所の人びとを交えてインフォーマルにおこなった。これに加えて、観察も適宜おこない、実際にそれぞれの活動をおこなっているかどうかを現状に即して評価するように努めた。
- (9) 病気や怪我などの場合、ADL 遂行に他人の補助を必要とすることがある。さらに高齢になるとそのような病気や怪我をする確率も高まることが考えられる。今回の調査期間中には、そのような病気や怪我などで ADL の自立が難しいという高齢者は見当たらなかった。

参考文献

<邦文>

- 奥宮清人。2007。「82 歳のマラソンランナー」『エコソフィア』19: 43-51。
- 重田眞義。2004。「エチオピア高地の定期市—コーヒーの葉とエンセーテを交換する」梅棹忠夫・山本紀夫編『山の現在』岩波書店, pp. 197-206。
- 石根昌幸, 笠原順子, 奥宮清人, 松林公蔵。2007。「中国雲南省香格里拉の高所地域在住高齢者に対する総合機能評価」『ヒマラヤ学誌』8: 49-55。

< 欧文 >

- Apt, N. 1997. *Aging in Africa*, World Health Organization, Geneva.
- Cohen, B. & J. Menken, eds. 2006. *Aging in Sub-Saharan Africa: Recommendations for Furthering Research*, pp. 9–51. The National Academies Press, Washington, D.C.
- Gebre, Y. 1995. *The Ari of Southwestern Ethiopia: An Exploratory Study of Production Practices, Social Anthropology Dissertation 2*, Addis Ababa University, Addis Ababa.
- United Nations 2008. *World Population Prospects 2012 revision*. Online. <http://esa.un.org/wpp/index.htm> (2013年1月16日参照).